様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２３７７

研究課題名（和文）中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究

研究課題名（英文）Comparative Study of Medieval Epistolary Practice of Governance and Order Formation in Japan and Europe.

研究代表者
高橋　一樹（Takahashi, Kazuki）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：８０３００６８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　12,400,000円

研究成果の概要（和文）：中世の日本と西欧における支配階層の文書実践では、書簡形式の繁茂という共通した現象がみられる。本研究では、その動態の日欧間における異同を史料学的および歴史学的に分析した。書簡をめぐる学的体系と史料類型での位置づけ、伝来形態、リテラシーなどが決定的に相違する一方で、書簡形式文書の生成と機能に関する比較で共有すべき分析視角が得られた。多様なコミュニケーション手段のなかで書簡が選択される条件、さらには「書簡の文書化」と「文書の書簡化」からなる２つのベクトルと両者の関係性である。また、書簡を作成する知識・情報の体系化とその可視化についても、階層差や地域差を視野に入れた比較材料となることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
国内外の日欧中世史料研究者による書簡形式文書の原本調査と即物的な議論を日欧で計５回実施するとともに、その成果をふまえた国際シンポジウムを開催した。これらを通じて、日本と西欧とで別々に進められてきた書簡形式文書研究の交流と論点の共有、さらには史料の即物的な観察による情報の抽出方法と意味づけについての相互参照や応用をはかり、日欧それぞれの書簡形式文書をめぐる学的状況を相対化することができた。研究成果は学術論文集にまとめて令和６年（2024）に刊行するとともに、その巻頭では鮮明なオリジナル史料の図版を多くもちいて、基本事項の解説を加え、日欧中世の書簡形式文書に関する小図録を意図した口絵を付載する。

研究成果の概要（英文）：In the practice of documents by the ruling class in Japan and Europe in the Middle Ages, there is a common phenomenon of the proliferation of the form of letters. In this study, we analyzed the differences in their dynamics between Japan and Europe from the viewpoints of historical sources and historicals. While there are decisive differences in the academic system of letters and their position in historical source types, forms of transmission, literacy, etc., we have obtained an analytical perspective that should be shared by comparing the generation and function of letter-style documents. These are the two vectors for Epistolary situation, and the mutual relationship between letters and documents. In addition, it was clarified that the systematization and visualization of knowledge and information in the preparation of letters can be used as comparative materials with a view to class and regional differences.

研究分野：日本中世史

キーワード：書簡形式文書　比較　中世　比較史料　コミュニケーション　書簡　儀礼

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

過去の人間の諸活動と直接かかわるメディアとしての古文書等に観察される物的情報を多国・多地域間で突き合わせ、背後にある国制や社会構成の異同を見出そうとする比較史料論が提起されて久しい。その主たる対象は、日欧の場合、文書形式学ないし古文書学の核心的素材とされてきた中世文書であるが、それぞれの中世史料論は前世紀後葉以来、ともに機能論の発想と様式・形式論からのパラダイム転換にみられる類似の学問的状況にありながら、相互の交流はもとより、史料原本に即した比較研究の試みは皆無に近い状況であった。

加えて日本国内においても、近代以来の古文書学とほぼ置換可能な中世文書研究が自律的に進展する一方で、1990 年代から急速な進歩を遂げた古代文書研究との架橋が十分になされず、両者の間に大きな断絶を抱えたまま現在にいたる。

本研究はこうした研究状況の克服を意図しながら、古代から中世への移行、さらに中世の展開過程を捉え返す物的素材として、古代末から中世の日本と西欧とに共通する書簡形式文書の繁茂と発展をとりあげ、中世における統治実践の具体相を史料の原本調査に依拠した比較文書論的手法のもとに解明することをめざす。

２．研究の目的

①日本と西欧の中世社会を対象に、支配階層の政治的コミュニケーションにもちいられる書簡形式文書の様式・形態および機能の比較を通じて、統治の実務運営や支配階層内での秩序編成のありかたに関する日欧相互の個別歴史性を明らかにする。

②日欧の古文書原本に立脚した分析と情報共有を通じて、文書史料に関する基本的な性格規定や文書類型、分析概念などで多国・多地域との対話を可能にするべく、日本の古文書学のグローバル化をはかり、比較文書学の創生に寄与しうる学問的基盤の構築に着手する。

３．研究の方法

①書簡形式文書を基軸としながら、作成・保存・機能の動態で有機的なつながりをもつ文書のまとまりをも視野に入れ、それらをツールとした政治的コミュニケーションの実態を相互比較的に検証する。とくに書簡形式文書の外層（書体、レイアウト、支持体の素材）からの情報を重視し、文書以外の伝達ツール（音声など）と融合した分析を行う。

②書簡形式文書の機能とその遷移、それに即した空間的環境や伝来形態（史料として認識しうる姿にいたるまで）の復元をふまえ、古代末期から中世を通じた日欧それぞれの史料類型や研究手法の異同を相互に理解したうえで、メタ・レベルでの論点・分析概念の模索と共有をはかる。

③上記の物的証拠を担保する史料情報の精査と獲得を徹底するために、日欧双方の文書史料保存機関において、書簡形式文書以下の中世史料原本をオリジナルの状態で集中的に検討する機会を複数回にわたり設定する。

④調査・研究の経過や成果を欧州研究者の招聘研究会・史料調査ワークショップや国際シンポジウムで発信・共有することを介して、本研究に関心を寄せる国内外の研究者とのインタラクティブな研究手法を広く実践する。

４．研究成果

（1）招聘研究会・史料調査ワークショップ

①書簡形式文書オリジナルの研究動向

2018 年 3 月 11 日・12 日

ブノワ＝ミシェル・トック（ストラスブール大学）を招き、日本中世の戦士エリート（武士）や僧侶らの書状原本を数多く保管する神奈川県立金沢文庫において、史料原本とその多様な伝来形態（おもに単葉での証書としての保存、寺院聖教の料紙に利用された紙背文書、仏像の胎内文書）を実見しながら討議を行うワークショップを開催した。続く研究会では、トック報告「中世ヨーロッパにおける書簡オリジナル」および高橋一樹（明治大学）による日本中世からのコメントをふまえて、西欧中世における書簡形式文書の諸特徴や証書との関係について幅広く質疑を行った。

②政治的コミュニケーションにおける書簡形式文書

2019 年 3 月 8 日・9 日

マルタン・グラヴェル（パリ第８大学）を招聘して、日本古代・中世の書簡形式文書や書簡集の原本、それらの研究状況に関するワークショップを国立歴史民俗博物館で行うとともに、グラヴェルの報告「初期中世における政治的コミュニケーションと書簡」にもとづき、日本中世との対比を意識しつつ、中世の隔地間における政治的コミュニケーションの文脈から書簡の形式・様式とその機能の様態を論じる研究会を開いた。広大なカロリング朝の支配領域を構成する多様な国々の貴顕らと宮廷とのコミュニケーション手段のなかで、その権力の最盛期に濃密にやりとりされた書簡を重視して分析を加える報告内容からは、日本中世の公武権力の複合した特殊

な国制に対応する書簡形式文書の創出と使用などにも比較の論点がおよび、統治行為の実態に引き付けるかたちで書簡形式文書の形式的・機能的特徴を抽出する視点と方法に議論を深めることができた。

③西欧中世書簡形式文書の調査
2019 年 3 月 19 日～21 日
　過去２回の招聘研究会および史料調査ワークショップなどにおいて、国王などの発給する証書と書簡形式文書との様式・形式の相違を機能の動態に即して分析することの意義が再認識されたことをふまえ、フランス・アルザス地方のストラスブールとコルマールのアルシーヴにおいて、世俗君主のみならず中世盛期以降の教皇・司教といった教会権力の発給文書の原本を閲覧・撮影し、ブノワ＝ミシェル・トックらの詳細な解説を得て、日欧文書比較の方法論的課題を文書原本の情報に即して討議した。
　なお、この調査成果をふまえて、小林亜沙美（レーゲンスブルク大学、現在は就実大学）の一時帰国にあわせて、中世教皇文書を特徴づける書簡形式文書についての詳細なレクチャーを受け、原本画像を駆使しながら日本史側の質疑を軸に中世教皇書簡の文書学的知識を高める研究会を開いた。

④中世文書学の日欧交流
2019 年 12 月 6 日・8 日
　オリヴィエ・ポンセ（フランス国立古文書学校）を招き、報告「フレデリック・ジュオン・デ・ロングレ 日本への文書学の伝達者」および佐藤雄基（立教大学）・高橋一樹からのコメントをもとに、日仏間の法制史研究者による学術交流を経て 1950 年にフランス国立古文書学校から刊行されたジュオン・デ・ロングレ著“Age de Kamakura Sources”（ヨーロッパ文書学の立場から鎌倉時代を中心とした日本中世の古文書について概説したもの）の内容検討と中世文書学の発展過程における日欧比較の実践に焦点を据える研究会を開いた。さらに東京大学史料編纂所において、ロングレの同所での研究滞在に関する資料確認を行い、近代以降の史料採訪をふまえた影写本や影印本（写真帳）の作成について、熟覧を交えながら中世史料編纂を担当する同所の研究者たちとの意見交換を行った。
　なお、この招聘研究会に先立ち、岡崎敦（九州大学）によるロングレの著作についての概要を紹介する報告をもとに、日本中世文書に関する叙述が石井良助の法制史研究を基盤としたとみられる点など、日本中世史研究者との意見交換を交えた準備研究会が組織された。

⑤地方領邦君主のアーカイブスと書簡形式文書・書簡作成術
2021 年 2 月 12 日（オンライン開催）
　ジャン‐フランソワ・ニウス（ナミュール大学）の報告「11–13 世紀フランス北部における「領主の」証書とアーカイヴズ」を得て、中世のフランス北部およびベルギー西部における地方領邦領主の文書実践に視野を広げ、書簡形式文書の作成と使用が増大する状況の歴史的背景とその日欧間での異同について議論を重ねた。
　なお、この招聘研究会を準備するために、加納修（名古屋大学）によるニウスの研究業績に関する紹介と、比較対象とする日本中世の大名アーカイブスを概説した高橋一樹の報告をもとにした研究会を事前に開催した。

⑥書簡形式文書の物質的情報
2023 年 2 月 19 日～22 日
　過去 2 回にわたりオンライン形式での報告とディスカッションに参加していただいたジャン‐フランソワ・ニウスを招聘して、神奈川県立金沢文庫および東京大学史料編纂所において日本中世の書簡形式文書と書簡作成術（書札礼）、比較対象としての証書（安堵状・裁許状、土地売買文書）の原本を閲覧しながら、討議を行うワークショップを開催した。さらに研究会では、ニウス「中世盛期の書簡の物的側面について（11–13 世紀）」および高橋一樹「日本中世の武家アーカイブス」の報告２本にもとづき、報告内で多用された日欧それぞれの史料原本の画像をふまえながら、日欧中世末期の大名や地方領邦君主の書簡形式文書や書簡作成術資料（書札礼）が帯びる形態的特徴とそれにいたる段階的変化などについて比較する議論を行った。

（2）国際シンポジウム
「中世社会と書状―文書実践の日欧比較―」
2022 年 3 月 10 日～11 日（オンライン開催）
　中世書簡形式文書の日欧比較に関する過去３年間の研究成果を、国王による統治、紛争解決、宗教組織、書簡作成術の４つトピックに即して集約する国際シンポジウムを実施した。各セッションの報告者とタイトルは以下のとおり。
セッション１．古代末～初期中世の国王・教皇を中心とした文書と書簡
　坂上康俊（九州大学）「天皇が「御書」を出すとき」
　マーク・メルジオヴスキ（シュツットガルト大学）「古代末期からカロリング期までの君主書簡と教皇書簡」

セッション2．初期中世の司法を中心とした社会秩序の維持と書簡・書簡体文書
佐藤雄基（立教大学）「書状を手にした武士たち―鎌倉幕府判決文書から探る文書実践―」
加納　修（名古屋大学）「カロリング期の紛争解決における書状の利用をめぐって―アインハルトの書状と嘆願状の書式をもとに―」
セッション3．初期～前期中世の宗教的権威と書簡体文書
貫井裕恵(神奈川県立金沢文庫)「書札からみた中世寺院の意思伝達と組織―東寺を中心に―」
菊地重仁（青山学院大学）「カロリング期における聖職者たちの書簡―目的と機能―」
セッション4．中世後期の書簡書式集と利用の諸相
マルクス・リュッターマン（国際日本文化研究センター）「中世盛期の和語書簡作成術とその書面」
ジャン-フランソワ・ニウス（ナミュール大学）「13 世紀フランドルにおける「書式集」の実践―書簡術・行政運営・政治的ガバナンスのはざまで―」
ラウンドテーブル　岡崎敦（九州大学）「結論」
２日間にわたる各セッションでの報告と個別質疑をふまえ、最後のラウンドテーブルでは、50名超の参加者による全体討論を行い、いわゆる Epistolary situation（書簡状況）の具体相について、他のコミュニケーション手段との関係はもとより、書簡形式が選択される個別状況、書簡作成術の内容とその可視化、書簡の伝来形態の特徴といった、日欧比較の重要な論点を明確にすることができた。

（3）総括と課題

本研究の方法的特色は、既成の共通する分析概念（たとえば「封建制」など）のもとで異文化社会の構造などを比較し意味づけるのではなく、中世日欧の書簡形式文書というモノが帯びる多様な情報それ自体を軸に、その解析手法や歴史的解釈のあり方にも踏み込んで、相互比較的に検討を加えることで、文書を主たるツールのひとつとした政治的コミュニケーションにおける日欧双方の個別歴史性を明らかにするというものである。

日本と西欧とにおける文書学のあいだには、文書類型はもとより、“文書”概念も異なり、“書簡”ないし書状という日本語で表現・呼称される書面の実態やそれをめぐる学的状況も大きく異なっている。西欧における書簡は、そもそも“文書”とは異なる史料類型であり、古代からの文芸的書簡や書簡集の編纂を素材とした文学をはじめとする独自の研究分野の傍ら、中世を通じて繁茂する書簡形式文書への史料学的関心が近年高まっている。これに対して、日本の前近代における書状は、古代から文書の範疇に含まれる一類型であり、一部に高僧などのしたためた文芸的書簡を扱う文学研究があるものの、中央・地方の支配階層が個人で発給した行政ツールとして、さらに中世社会では書簡形式文書の証書化という理解を含め、もっぱら歴史研究の史料として扱われてきたのである。

本研究は日欧間でのこうした比較研究上の異なる前提条件を明らかにするところから出発し、日欧間での中世書簡形式文書をめぐる実態認識と基礎的な史料情報の共有が不可欠となった。にもかかわらず、その過程で、2008 年のオルレアン「中世文学書簡に関する研究集会」に際し、オリヴィエ・ギョジャナン（フランス国立古文書学校）報告の掲げていた、「書簡の文書化」および「文書の書簡化」という２つのベクトルの働きが、西欧中世の文書形式のトレンドを理解する方法というギョジャナンの意図をこえて、日本の古代末から中世における書簡形式文書の分析にも適用可能な、中世日欧の文書実践に関する分析視角として共有すべきであると認識できたことが特筆される。

研究分担者の岡崎敦による紹介をもとにギョジャナンの説明を要約すれば、「文書の書簡化」とは、西欧中世における文書実践の普及と深化の進展が、発給手続きの簡素で個別の状況に寄り添いやすい、より緩やかな文書形式の採用をもたらす現象を意味する。他方の「書簡の文書化」は、新たに書簡化されていく文書の形式がそれら文書の書記たちの実践を経るなかで、文書体系に整理・制度化されるプロセスをさす。

もとより、このような整理が構想される背景には、前述のような文書と書簡との区別があるわけだが、書簡（書状）を文書の一類型に位置付ける日本中世にあっても、ギョジャナンのいう２つのベクトルは、これまで「書札様文書の公文書化」と表現されてきた日本中世文書史の特徴を普遍的に説明・叙述したものといえる。そこでは、日本の古代末から中世にかけての書簡形式文書を、形式・様式面での自由度が相対的にもっとも高い文書類型と捉え、古代国家の行政法に規定される官庁・組織間でやりとりされる厳密な形式・様式をともなった文書類型では対応できない、より豊かな情報を収録・伝達できるフォルムとして位置づけ直す態度が導かれる。すでに日本古代文書の先端的な研究で意識されていた、このような書簡形式文書の性格規定を共有するところから、日本中世文書研究も再出発する必要がある。

さらに日本の古代末から中世を通じて、書状＝書簡形式文書が行政的手続きの書面から権利証書化していく過程を重視するのみならず、もともと証書として作成・機能していた文書類型に書状形式が入り込み、段階的に書状形式が増加傾向をたどる、という現象も自覚的に追究せねばならない。たとえば、すでに個別の史料類型ごとに実態の究明が進められている、軍勢催促状や感状などの軍事関係文書、おもに親族内で所領の譲渡配分を可視化した譲状、歎願状（申状）や復命書（請文）といった上申文書などに、13 世紀後半から書簡形式の選択が進む史料状況が観察される。

これは「文書の書簡化」の日本中世における具体例のひとつであり、その背景には、広義の統治実践に参与することになった人びとが、書簡形式を採用することで、既存の文書形式を用いるのとは異質なコミュニケーションを企図する社会環境の到来を想定することができる。

その際、相対的に自由度が高いフォルムであるがゆえに、日欧ともに書簡形式文書を特徴づける差出と宛先（その多くが受取者）との関係性に応じた、文章表現や用語、サインなどの記号、支持体の形状や質・折りたたみ方などの要素を組み合わせた儀礼的情報のバリエーションを多様化する動きとその規範化という文書実践が、中世社会（日本ではとりわけ書札礼の出現する 13 世紀後半以降）の特徴的な現象として浮上してくることになる。

この論点ともかかわって、書簡形式文書を作成・使用する階層と地域が拡大するなか、かれらを覆う秩序はどのように編成（再編成）されるのか、という問題を比較史料論的に分析するうえで、書簡作成術の内容とその書面化（日本では書札礼、往来物など）が好個の素材となることを発見できた。しかし、パンデミックによる長期間の渡航制限により欧州側の史料原本にアプローチすることが叶わず、今後の課題として残さざるを得ない。

書簡形式文書の伝来形態における日欧間の異同については、日本中世のオリジナル保存と西欧中世の書簡集作成とのコントラストが強調されがちである。しかし、機能論的にみると、記録や典籍などの紙背文書として原本が伝来した日本中世の書状群については、西欧のパリンプセストに似た料紙の再利用ではなく、特定のコンテクストのもとに集約された「文書集」の性格を有するケースが見受けられる。逆に西欧の書簡集についても、複合的な機能・性格を追究すべきことが国際シンポジウムのラウンドテーブルで提起された。この点も比較文書論的研究の新たなフロンティアとなるにちがいない。

中世社会のなかの多様な書簡状況を探るうち、「書簡の文書化」および「文書の書簡化」という２つのベクトルを比較軸として共有することにより、日本中世における書簡形式文書の繁茂という史料現象は、西欧中世のそれとは本質的に異なる個別歴史性として理解することができた。すなわち、古代以来の政府組織とその官僚制の変質（弛緩）に加え、戦士エリートを主体とした軍事政権の成立と存続、国家権力にしめる比重の増加によって、明らかに古代とは異なる統治行為の諸契機が地域社会にまで胚胎していくことこそが、形式上の自由度の高い書簡形式文書の汎用化をますます高める要因であった。その過程では、いわば使い勝手のよい政治的コミュニケーションのメディアとして頻用される書簡形式文書は、その授受と機能にかかわる人間と人間の個別直接的な対応関係（身分差など）をきわめて強く意識した儀礼的性格を発達させていくことになる。

他方、日本中世の書簡形式文書に観察される濃厚な儀礼的性格の具体相を抽出する方法は、これまでドメスティックな研究環境下で独自に育まれてきただけに、西欧中世の書簡形式文書の分析にも裨益するところが少なくない。15 世紀以前は書簡原本の現存例が限られ、多数のテクストがカルチュレールなどの文書集に収録されて伝来する史料形態のゆえに、原本の詳細な観察から得られる折り目や印璽の付け方をふまえた書簡形式文書の原状復元とその機能論的考察は、日本中世の古文書学における比較的豊富な実例に即した研究手法を応用することで、新たな分野の開拓も可能である。ジャン‐フランソワ・ニウスによるフランドルの地方領邦君主による書簡を交えた中世西欧の事例研究（おもに 2023 年 2 月の招聘研究会報告と討論）は、西欧側の方法論的蓄積を基盤としつつも、本研究での度重なる研究交流（とくに日本中世の書状オリジナルを熟覧しながらの議論）がもたらした成果の反映と考える。

最後に、本研究のより詳細な成果の公表は、招聘研究会および国際シンポジウムでの報告ペーパーに他の研究メンバーの論考を加えて、全体を統一的に再構成した学術論文集を令和６年（2024）春に刊行する予定である。その巻頭には、中世日欧の書簡形式文書に関する複数の画像と基本事項の解説からなるミニ図録ともいうべき口絵ページを収録する計画であることを付記する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計37件（うち査読付論文　16件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 坂上康俊	４．巻 69
２．論文標題 佐々木恵介著『日本古代の官司と政務』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 法制史研究	６．最初と最後の頁 125‐129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂上康俊	４．巻 129‐5
２．論文標題 回顧と展望 日本古代 総説	５．発行年 2020年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 37‐39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂上康俊	４．巻 149
２．論文標題 小口雅史編『古代東アジア史料論』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 弘前大学国史研究	６．最初と最後の頁 47‐48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂上康俊	４．巻 721
２．論文標題 入唐僧と刺史の印信	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本史研究	６．最初と最後の頁 32‐48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小口雅史	4．巻 68
2．論文標題 十川陽一著「律令国家と出羽国－地域的特質についての基礎的考察－」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 法制史研究	6．最初と最後の頁 207‐210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小口雅史	4．巻 92
2．論文標題 「越境」する断片たちをなんと呼ぶか―敦煌・吐魯番文書研究余話―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 法政史学	6．最初と最後の頁 182‐186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡崎敦	4．巻 984
2．論文標題 フランス革命とアーカイブズ ―近代的文書館の形成と変容―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 57‐66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡崎敦	4．巻 157
2．論文標題 Eveques et chapitre entre collaboration et concurrence (XIe-XIIe siecles) : L’apport diplomatique	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Shien (Journal of History)	6．最初と最後の頁 57‐102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡崎敦	4．巻 34
2．論文標題 デジタル時代のアーカイブズ学と文書学	5．発行年 2020年
3．雑誌名 クリオ	6．最初と最後の頁 119‐125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 マリアン・フュッセル（前田星・田口正樹訳）	4．巻 70‐3
2．論文標題 法律家は悪しきキリスト教徒？―近世の専門家批判としての法律家批判	5．発行年 2019年
3．雑誌名 北大法学論集	6．最初と最後の頁 279‐309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 マリアン・フュッセル（前田星・田口正樹訳）	4．巻 70‐5
2．論文標題 間近から見たグローバル・ヒストリー―当事者たちの証言による七年戦争（1756-1763年）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北大法学論集	6．最初と最後の頁 61‐81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アルブレヒト・コルデス（田口正樹訳）	4．巻 70‐1
2．論文標題 リューベック法の体系化―バルデヴィク写本（1294年）をめぐって	5．発行年 2020年
3．雑誌名 北大法学論集	6．最初と最後の頁 117‐140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田口正樹	4．巻 103‐2
2．論文標題 服部良久著『中世のコミュニケーションと秩序―紛争・平和・儀礼』	5．発行年 2021年
3．雑誌名 史林	6．最初と最後の頁 64‐70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田口正樹	4．巻 70
2．論文標題 櫻井利夫「（補論）中世盛期バイエルンの貴族ファルケンシュタイン伯の城塞支配権―領域支配権の視角から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 法制史研究	6．最初と最後の頁 432‐434
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 マルクス・リュッターマン	4．巻 150
2．論文標題 Uebereinstimmung ist 'ausserhalb der menschlichen Zeit'. Kursorisch ueber Subjektivitaet und Partikularitaet zum Ende der Aera Heisei	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Weile, ohne zu wohnen. Festschrift fuer Peter Poertner	6．最初と最後の頁 385‐410
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤雄基	4．巻 129‐10
2．論文標題 鎌倉時代における天皇像と将軍・得宗	5．発行年 2020年
3．雑誌名 史学雑誌	6．最初と最後の頁 4‐34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤雄基	4．巻 1007
2．論文標題 鎌倉幕府の《裁判》と中世国家・社会	5．発行年 2021年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 49‐58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤雄基	4．巻 224
2．論文標題 鎌倉北条氏の書状序説	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 75‐116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 貫井裕恵	4．巻 45
2．論文標題 歴史学からみた「千字文説草」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 仏教文学	6．最初と最後の頁 12‐19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金沢文庫本の会（貫井裕恵ほか）	4．巻 45
2．論文標題 名古屋市蓬左文庫蔵『斉民要術』紙背文書について（上）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 鎌倉遺文研究	6．最初と最後の頁 91‐104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金沢文庫本の会（貫井裕恵ほか）	4．巻 46
2．論文標題 名古屋市蓬左文庫蔵『斉民要術』紙背文書について（下）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 鎌倉遺文研究	6．最初と最後の頁 60‐82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 貫井裕恵	4．巻 (49) 1-4
2．論文標題 安達氏の拠点・甘縄ー無量寿院とその周辺	5．発行年 2021年
3．雑誌名 かまくら考古	6．最初と最後の頁 1‐4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 TAKAHASHI kazuki	4．巻 一
2．論文標題 Commendation of Land in Medieval Japan and Its Social Function.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 TOYO BUNKO RESEARCH LIBRARY 19, Comparative Study of the Waqf from the East	6．最初と最後の頁 131-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 小口　雅史	4．巻 一
2．論文標題 款状（申文）ー応徳三年正月二十三日付「前陸奥守源頼俊款状」を読む	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『古代史料を読む』下　平安王朝篇	6．最初と最後の頁 124-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小口　雅史	4．巻 90
2．論文標題 マルティン・ルター「宗教改革」五〇〇年	5．発行年 2018年
3．雑誌名 法政史学	6．最初と最後の頁 116-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Osamu Kano	4．巻 一
2．論文標題 Quelques reflexions sur les formes de la fides facta	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Confiance, bonne foi, fidelite : La notion de fides dans la vie des societes medievales(VIe-XVe s.)	6．最初と最後の頁 51-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤　雄基	4．巻 667
2．論文標題 文書史からみた鎌倉幕府と北条氏一口入という機能からみた関東御教書と得宗書状	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本史研究	6．最初と最後の頁 24-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤　雄基	4．巻 127(6)
2．論文標題 書評　近藤成一著『鎌倉時代政治構造の研究』	5．発行年 2018年
3．雑誌名 史学雑誌	6．最初と最後の頁 86-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田口　正樹	４．巻 68
２．論文標題 ドイツ騎士修道会対ミュールハウゼン市－１４世紀ドイツの国王裁判権と教会裁判権」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 法制史研究	６．最初と最後の頁 85-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Masaki TAGUCHI	４．巻 135
２．論文標題 Freiwillige Gerichtsbarkeit und Bestatigungen am Herrscherhof im deutschen Spatmittelalter (1273－1400)	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Zeitschrift der Savigny-Stiftung fur Rechtsgeschichte, Germanistische Abteilung	６．最初と最後の頁 69-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.26498/zrgga-2018-1350101	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田口　正樹	４．巻 10
２．論文標題 Ellen WIDDER, Kanzler und Kanzleien im Spatmittelalter. Eine Histoire croisee furstlicher Administration im Sudwesten des Reiches, [Veroffentlichungen der Kommission fur geschichtliche Landeskunde in Baden-Wurttemberg, Reihe B: Forschungen, Bd. 204], Stuttgart, W. Kohlhammer Verlag, 2016, 602p.	５．発行年 2018年
３．雑誌名 西洋中世研究	６．最初と最後の頁 255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐藤雄基	４．巻 16
２．論文標題 朝河貫一とジョン・ケアリー・ホールの往復書簡の紹介：1910年代英語圏における日本史研究と日本アジア協会の歴史家たち	５．発行年 2017年
３．雑誌名 立教大学日本学研究所年報	６．最初と最後の頁 82-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田口正樹	4．巻 68-2
2．論文標題 ヴェンツェル時代のドイツ国王裁判権と確認行為	5．発行年 2017年
3．雑誌名 北大法学論集	6．最初と最後の頁 1-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田口正樹	4．巻 68-1
2．論文標題 中世後期ドイツ国王裁判権の活動としての確認行為（３・完）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 北大法学論集	6．最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐藤雄基	4．巻 667
2．論文標題 文書史からみた鎌倉幕府と北条氏―口入という機能からみた関東御教書と得宗書状	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本史研究	6．最初と最後の頁 24-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田口正樹	4．巻 67
2．論文標題 （書評）若曽根健治「中世都市の裁判と「真実」の問題―シュトラースブルク都市法から」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 法制史研究	6．最初と最後の頁 472-474
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 貫井裕恵	４．巻 2017
２．論文標題 金沢北条氏における書様―「唐様」をめぐって	５．発行年 2017年
３．雑誌名 唐物KARA-MONO―中世鎌倉文化を彩る海の恩恵―	６．最初と最後の頁 112-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　5件／うち国際学会　10件）

１．発表者名 坂上康俊
２．発表標題 天皇が「御書」を書くとき
３．学会等名 International Symposium, The Use and Function of Letters in the Medieval Society: Comparative Studies on Documentary Practice in Japan and Europe（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡崎敦
２．発表標題 ジュオン・デ・ロングレ『鎌倉時代 資料』（1950年）と日欧文書学
３．学会等名 中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡崎敦
２．発表標題 フランスにおけるアーキビスト養成の現在
３．学会等名 2019年度広島史学研究会大会西洋史部会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡崎敦
２．発表標題 デジタル時代の文書学とアーカイブズ学：変容のなかにある史料研究と情報管理
３．学会等名 Tokyo Digital Historyシンポジウム（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡崎敦
２．発表標題 結論
３．学会等名 International Symposium, The Use and Function of Letters in the Medieval Society: Comparative Studies on Documentary Practice in Japan and Europe（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 加納修
２．発表標題 フランス北部およびベルギー西部における世俗領主の文書実践
３．学会等名 中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 加納修
２．発表標題 L’usage des lettres dans le règlement des conflits à l’époque carolingienne, d’après les lettres d’Éginhard et les formules de lettre de supplication
３．学会等名 International Symposium, The Use and Function of Letters in the Medieval Society: Comparative Studies on Documentary Practice in Japan and Europe（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 菊地重仁
２．発表標題 Briefe der Geistlichen in der Karolingerzeit: Zwecke und Funktionen
３．学会等名 International Symposium, The Use and Function of Letters in the Medieval Society: Comparative Studies on Documentary Practice in Japan and Europe（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 マルクス・リュッターマン
２．発表標題 中世盛期の和語書簡作成術とその書面
３．学会等名 International Symposium, The Use and Function of Letters in the Medieval Society: Comparative Studies on Documentary Practice in Japan and Europe（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐藤雄基
２．発表標題 書状を手にした武士たち―鎌倉幕府判決文書から探る文書実践
３．学会等名 International Symposium, The Use and Function of Letters in the Medieval Society: Comparative Studies on Documentary Practice in Japan and Europe（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 貫井裕恵
２．発表標題 書札からみた中世寺院の意思伝達と組織―東寺を中心に
３．学会等名 International Symposium, The Use and Function of Letters in the Medieval Society: Comparative Studies on Documentary Practice in Japan and Europe（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡崎　敦
２．発表標題 西欧中世における文書と「書簡」　―近年の研究動向とフランス王文書の例―
３．学会等名 第68回日本西洋史学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 SATO Yuki
２．発表標題 Seals and Kao-signatures in medieval and early modern Japan
３．学会等名 4th congress of the Asian Association of World Historians (AAWH)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤　雄基
２．発表標題 日本古文書和書状：从古代到中世紀
３．学会等名 第七届“中国古文書学”国際学術研討会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋　一樹
２．発表標題 コメント（日本中世史の立場から）
３．学会等名 第68回日本西洋史学会大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡崎　敦
２．発表標題 フランス革命とアーカイブズ　―近代的文書館の形成と変容―
３．学会等名 平成30年度九州史学会西洋史部会
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤雄基
２．発表標題 文書史からみた鎌倉幕府と北条氏
３．学会等名 2017年日本史研究会大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐藤雄基
２．発表標題 文報告に対するコメント１:日本史の視点から
３．学会等名 国際シンポジウム「史料形態からみた日本・朝鮮・ベトナム比較史の試み」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計21件

１．著者名 高橋一樹ほか	４．発行年 2019年
２．出版社 高志書院	５．総ページ数 353
３．書名 戦国期文書論	

１．著者名 小口雅史、坂上康俊、マーク・メルジオヴスキ、津田拓郎（訳）、高橋一樹、マルクス・リュッターマン、岡崎敦、佐藤雄基、加納修ほか	４．発行年 2020年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 241
３．書名 儀礼・象徴・意思決定―日欧の古代・中世書字文化―	

１．著者名 田口正樹、岡崎敦、高橋一樹ほか	４．発行年 2021年
２．出版社 刀水書房	５．総ページ数 566
３．書名 歴史的世界へのアプローチ	

１．著者名 高橋一樹ほか	４．発行年 2022年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 316
３．書名 人文学のレッスン	

１．著者名 坂上康俊ほか	４．発行年 2020年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 320
３．書名 日本古代律令制と中国文明	

１．著者名 坂上康俊ほか	４．発行年 2021年
２．出版社 同成社	５．総ページ数 509
３．書名 古代国家の政治と社会	

１．著者名 坂上康俊（石暁軍訳）	４．発行年 2021年
２．出版社 文匯出版社	５．総ページ数 360
３．書名 講談社日本的歴史03　律令国家的転変　奈良時代平安時代前期	

１．著者名 加納修ほか	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 340
３．書名 論点・西洋史学	

１．著者名 加納修	４．発行年 2020年
２．出版社 清水書院	５．総ページ数 369
３．書名 侠の歴史 西洋編(上)＋中東編	

１．著者名 佐藤雄基、高橋一樹ほか	４．発行年 2020年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 401
３．書名 古文書の様式と国際比較	

１．著者名 神奈川県立金沢文庫（貫井裕恵ほか）	４．発行年 2021年
２．出版社 神奈川県立金沢文庫	５．総ページ数 112
３．書名 よみがえる中世のアーカイブズ―いまふたたび出会う古文書たち―	

１．著者名 東寺文書研究会（貫井裕恵ほか）	４．発行年 2022年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 300
３．書名 東寺執行日記　第一巻	

１．著者名 佐藤信･小口雅史	４．発行年 2018年
２．出版社 同成社	５．総ページ数 293
３．書名 『古代史料を読む』下　平安王朝篇	

1．著者名 高橋典幸・五味文彦・佐藤雄基・榎本渉・西田友広・大塚紀弘・小瀬玄士・遠藤珠紀・川本慎自・中島圭一・岡本真・三枝暁子・呉座勇一・阿部浩一	4．発行年 2019年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 266
3．書名 中世史講義ー院政期から戦国時代まで	

1．著者名 高橋 慎一朗（編著）、千葉 敏之（編著）	4．発行年 2017年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 256
3．書名 移動者の中世	

1．著者名 春田直紀（編著）、佐藤雄基、小川弘和、薗部寿樹、似鳥雄一、榎原雅治、窪田涼子、池松直樹、熱田順、松本尚之、朝比奈新、大河内勇介、呉座勇一、渡邊浩貴、大村拓生、坂本亮太、山本倫弘、高橋一樹、湯浅治久、鶴島博和	4．発行年 2017年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 320
3．書名 中世地下文書の世界	

1．著者名 小田中直樹（編著）、帆刈浩之（編著）、千葉敏之	4．発行年 2017年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 352
3．書名 世界史／いま、ここから	

1．著者名 木村 靖二（編著）、岸本 美緒（編著）、小松 久男（編著）、千葉敏之	4．発行年 2017年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 576
3．書名 詳説世界史研究	

1．著者名 小口雅史（編著）、佐藤信（編著）	4．発行年 2018年
2．出版社 同成社	5．総ページ数 309
3．書名 古代史料を読む 上・律令国家篇	

1．著者名 高谷知佳（編著）、小石川裕介（編著）、佐藤雄基、桃崎有一郎、谷口眞子、丸本由美子、久保秀雄、岡崎まゆみ、見平典、酒巻匡	4．発行年 2018年
2．出版社 有斐閣	5．総ページ数 342
3．書名 日本法史から何がみえるか	

1．著者名 朝治啓三（編著）、渡辺節夫（編著）、加藤玄（編著）、田口正樹	4．発行年 2017年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 376
3．書名 ＜帝国＞で読み解く中世ヨーロッパ――英独仏関係史から考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小口　雅史 (Oguchi Masashi) (00177198)	法政大学・文学部・教授 (32675)	
研究分担者	千葉　敏之 (Chiba Toshiyuki) (20345242)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	坂上　康俊 (Sakaue Yasutoshi) (30162275)	九州大学・人文科学研究院・教授 (17102)	
研究分担者	岡崎　敦 (Okazaki Atsushi) (40194336)	九州大学・人文科学研究院・教授 (17102)	
研究分担者	加納　修 (Kano Osamu) (90376517)	名古屋大学・人文学研究科・教授 (13901)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	マルクス　リュッターマン (Marukus RUTTERMANN)	国際日本文化研究センター・研究部・教授 (64302)	
連携研究者	田口　正樹 (Taguchi Masaki) (20206931)	東京大学・大学院法学政治学研究科・教授 (12601)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	岩波　敦子 (Iwanami Atsuko) (60286648)	慶応義塾大学・理工学部・教授 (32612)	
連携研究者	菊地　重仁 (Kikuchi Shigeto) (80712562)	東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授 (12601)	
連携研究者	津田　拓郎 (Tsuda Takuro) (70568469)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	
連携研究者	佐藤　雄基 (Sato Yuki) (00726573)	立教大学・文学部・教授 (32686)	
連携研究者	貫井　裕恵 (Nukui Hiroe) (40782868)	神奈川県立金沢文庫・学芸課・学芸員 (82720)	
連携研究者	小林　亜沙美 (Kobayashi Asami) (60908911)	就実大学・人文科学部・准教授 (35307)	
連携研究者	向井　伸哉 (Mukai Shinya) (10828073)	大阪公立大学・大学院文学研究科・准教授 (24405)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
中世社会と書状―文書実践の日欧比較―	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関